

語レベルにおける音声文法の構想

宋 欣

1. はじめに

音声言語は言語の外在的な形式であるのみならず、言語の内在的な文法性の現れでもある。ところが、日本語文法の研究を遡って見ると、戦前は主に品詞分類とその活用を中心に、戦後は形態論と文の構造を中心に研究されてきた。ほとんどの文法学説は文字言語を対象に展開されてきたのである。しかし、1990年代以降、音声と文法の間を研究する学者が増えてきた。品詞とアクセント型について、窪園晴夫（1998）は、

語のアクセントは品詞とも少なからず関係している。日本語の名詞では平板型の語と語末から3モーラ目に核を有するタイプが多い。……日本語の動詞と形容詞は、名詞ほど多様なアクセント型を示さない。……動詞と形容詞の場合には音節数に関係なく、2通りのアクセント型しか出現しない。終止形に限定すると、平板式か語末から2モーラ目にアクセント核を有するタイプだけである。……名詞よりも形容詞・動詞の方が語末に近い位置にアクセントを有する傾向があるのである。

と述べている。このように、名詞・動詞・形容詞のアクセントには、一定の規則及び特徴のあることがわかる。なお、窪園晴夫はいわゆる形容動詞のアクセント規則には触れていない。また、窪園晴夫（1997, 2004）、上

野善道（1999）、佐藤大和（1989）は、様々な角度から複合語のアクセント、特に複合名詞の形態構造とアクセントの関係について詳しく述べている。ただし、転成語アクセントと文法に関する研究は少ないようである。

そこで、本稿では、従来の研究成果を踏まえた上で、語レベルにおけるアクセントという音声事実を文法研究の対象にし、品詞別に、日本語の内在的法則をまとめ、音声に現われた文法性を明らかにしたいと思う。紙幅の関係で自立語（体言・用言）だけを考察の対象にし、付属語については別稿に譲る。なお、以下に挙げる用例は、参考文献に示したアクセント辞典、『日本語アクセントの習得』等により、アクセント核（下げ核）は便宜「'」で表す。

2. 体言のアクセントは 0 型と－3 型が主流

体言には漢語、和語、外来語など、数多くの語が含まれ、そのアクセントの法則は複雑である。名詞にはすべての型の種類が見られるし、拍の多少、語種の違いによって各型の占める量が異なる。全体的に言えば、0 型（平板式）と－3 型（語末から数えて 3 拍目にアクセント核を持つ型）が主流を成し、拍数の増加によって 0 型から－3 型に転ずる傾向がある。

2.1 名詞のアクセント

2.1.1 1 拍語、2 拍語では 1 型が多い。

0 型の語は、その数は少ないが、日常よく使われる語であり、使用率が高い。それに対して、1 型の語は、漢語、外来語、日常あまり用いられない語、新造語である。拍数が 3 つあれば－3 型になるはずであるが、1・2 拍しかないので、1 型になることが多い。いわば－3 型の特殊ケースと見ることができる。

1 型：〈漢語〉リ'（理） ヤ'（夜） キ'（機） ダ'イ（代） ヤ'グ（夜具）

〈日常使わない語〉ヒ' (樋) カ' (寡) エ' (餌)

0 型: 〈和語〉カ (蚊) コ (子) チ (血) クマ (熊) フロ (風呂)

〈慣用句の一部〉マ (魔) ガサ' ス ミ (身) ヲクダ' ク

例外として、漢語 2 拍語のうち「キ、ク、チ、ツ」で終わるもの (いわゆる入声字に由来する漢語) には、-1 型が多い。

-1 型: シキ' (式) ニク' (肉) ハチ' (八) ネット' (熱)

2. 1. 2 3 拍以上の名詞のアクセントは 0 型と-3 型が大部分で、拍数が多くなるほど-3 型が増加する傾向がある。

3 拍語では 0 型が半数を占め、-3 型 (1 型) はその次、そして-1 型, 2 型という順である。-1 型, 2 型の語は 0 型, -3 型に転ずる傾向が見られる。それは名詞アクセントの文法性が強く働いているわけである。

0 型: サクラ (桜) アイダ (間) アクビ (欠伸)

-3 型: イ' ノチ (命) メ' ガネ (眼鏡) マ' クラ (枕)

-1 型→ 0 型: タラコ' →タラコ (鱈子) ヒガシ' →ヒガシ (東)

2 型→-3 型: ケハ' イ→ケ' ハイ (気配) セタ' イ→セ' タイ (世帯)

2 型→0 型: タマ' ナ→タマナ (玉菜)

-1 型, 2 型→0 型: ナカバ', ナカ' バ→ナカバ (半ば)

4 拍語では、二字漢語が圧倒的に多く、主に 0 型である⁽¹⁾。-3 型の語は 0 型に次いで多い。

0 型: ベンキョー (勉強) シンゲキ (新劇)

-3 型: ムラ' サキ (紫) ウグ' イス (鶯)

5 拍語以上の語では-3 型の語が圧倒的に多い。

－3 型：ホトト'ギス（不如帰） ミソサ'ザイ ミズス'マシ

2.2 複合名詞のアクセント

形態素自体がそれぞれのアクセントを持つが、まとまって一語になる時には、意味の融合の外に、アクセント構造の統語機能による音声的処理が行われ、一語のアクセントに統合される。そこに日本語文法に関わる法則と音声の内在的文法性がある。複合名詞のアクセントの法則は複雑であるが、上接語及び下接語が、音声的には拍、文法的には品詞に関わりながら、複合語のアクセントを0型、－3型に安定させている。－2型などは特別なケースにしか現れない。

2.2.1 0型複合名詞の文法的構成

(I) 名詞，形容詞語幹，副詞＋形容詞（形容動詞）語幹

ヨク'＋フ'カ→ヨクフカ（欲深）

ノゾミ＋ウス→ノゾミウス（望み薄）

ウス＋ア'オ→ウスアオ（薄青）

キ＋ヨ'ワ→キヨワ（気弱）

クチ＋ヘタ'→クチベタ（口べた）

ゴ'ク＋ホ'ソ→ゴクボソ（ゴク細）

(II) 名詞（主格），動詞連用形，形容詞語幹，副詞＋2拍の動詞連用形

ヨヤク＋スミ'→ヨヤクズミ（予約済み）

ヨメ＋イリ→ヨメイリ（嫁入）

オキ'＋ヌケ→オキヌケ（起き抜け）

カキ'＋トリ'→カキトリ（書き取り）

ク'ロ＋コゲ'→クロコゲ（黒焦げ）

ア'カ＋ムケ→アカムケ（赤剥け）

トモ＋カ'セギ→トモカセギ（共稼ぎ）

(Ⅲ) 名詞＋1・2拍の形態素（課・画・座・色・形・組・島・寺・党・病など）

ムラ'サキ+イロ'→ムラサキイロ（紫色）

オンナ'+カタ'→オンナガタ（女形）

ニホ'ン+ガ'→ニホンガ（日本画）

ジ'ンジ+カ'→ジンジカ（人事課）

（Ⅳ）動詞連用形，形容詞語幹+2 拍名詞

カンガ'エ+コト'→カンガエゴト（考えごと）

カレ+クサ'→カレクサ（枯れ草）

ア'カ+ハタ'→アカハタ（赤旗）

カル+クチ→カルクチ（軽口）

（Ⅴ）名詞（起伏式）+2 拍の名詞（起伏式）

ウ'ミ+カ'メ→ウミガメ（海亀）

ユキ'+アナ'→ユキアナ（雪穴）

（Ⅵ）名詞+5 拍以上（漢語 3 形態素を含む）の名詞（0 型）

ミナミ+カリフォルニア→ミナミカリフォルニア（南カリフォルニア）

ダ'イ+サクシカ→ダイサクシカ（大作詞家）

デ'ンシ+ケンビキョー→デンシケンビキョー（電子顕微鏡）

2.2.2 一3 型複合名詞の文法的構成

（Ⅰ）名詞+2・3 拍の動詞連用形（目的語と述語の関係）

サカナ+ツリ→サカナ'ツリ（魚つり）

インク+ケシ→インク'ケシ（インク消し）

（Ⅱ）名詞+3 拍の動詞連用形（補充語や連用修飾語と述語の関係）

ヤマ'+ノボリ→ヤマノ'ボリ（山登り）

テ'+コタ'エ→テゴ'タエ（手ごたえ）

（Ⅲ）名詞+2 拍，3 拍の語

ハ'ル+カゼ'→ハル'カゼ（春風）

ア'サ+サケ→アサ'ザケ（朝酒）

カ'ブト+ムシ→カブト'ムシ（カブト虫）

コ'ーム+イ'ン→コーム'イン（公務員）

ドーブツ+エ'ン→ドーブツ'エン（動物園）

イチニチ+アタリ→イチニチア'タリ（一日当）

シンリン+チ'タイ→シンリンチ'タイ（森林地帯）

(Ⅳ) 動詞連用形，形容詞語幹+3 拍名詞

ホシ'+ブドー→ホシブ'ドー（干しブドー）

シ'ロ+ウサギ→シロウ'サギ（白兎）

(Ⅴ) 名詞+名詞（-3 型）

ヤ'マト+ナデ'シコ→ヤマトナデ'シコ（大和撫子）

イソ'ップ+モノガ'タリ→イソップモノガ'タリ（イソップ物語）

2.2.3 -2 型名詞の文法的構成

(Ⅰ) 3 拍以上の名詞+1 拍語（区・市・者など）

ヨコハマ+シ'→ヨコハマ'シ（横浜市）

ト'ーチ+シャ→トーチ'シャ（統治者）

(Ⅱ) 名詞，副詞+2 拍名詞（-2 型）

ペ'ルシャ+ネ'コ→ベルシャネ'コ（ベルシャ猫）

ニ'ワカ+ア'メ→ニワカア'メ（俄雨）

以上の各型の文法的構成から見れば，0 型の複合名詞は文法的構成の種類が最も多く，ついで-3 型となっている。その中で，「形容詞語幹+形容詞（形容動詞）語幹」，「動詞連用形+動詞連用形」及び「形容詞語幹+動詞連用形」のような「用言+用言」という構造の複合名詞はほとんどが 0 型である。

2.3 転成名詞のアクセント

ある品詞に使われる語が何らかの変形を伴って，他の品詞に転ずることがある。それがいわゆる転成語である。転成語は元の品詞性を失って，別の品詞性を持つが，アクセントにおいては元の品詞のアクセント式を大きく変更することはない。

2.3.1 動詞連用形からの転成名詞

原則として元の単純動詞のアクセントの式を変えない。動詞のアクセントが平板式なら平板式，起伏式ならほとんど起伏式の－1型になっており，4拍の転成名詞アクセントは0型になることも多い。

0型→0型：2・3・4拍五段動詞→2・3・4拍名詞

アク→アキ（空き）	カス→カシ（貸し）
オドル→オドリ（踊り）	クラス→クラシ（暮らし）
オコナウ→オコナイ（行い）	ハタラク→ハタラキ（働き）

0型→0型：3・4拍一段動詞→2・3拍名詞

アレル→アレ（荒れ）	キメル→キメ（決め）
オシエル→オシエ（教え）	ハジメル→ハジメ（初め）

0型の五段・一段動詞の連用形が名詞に転成した場合，アクセント型が変わらず，アクセント核を持たない0型である。

起伏式からの転成名詞には若干の変化が見られる。

－2型→－1型：2・3・4拍五段動詞→2・3・4拍名詞

カ'ツ→カチ'（勝ち）	フ'ル→フリ'（降り）
ウラ'ム→ウラミ'（恨み）	クモ'ル→クモリ'（曇り）
アツマ'ル→アツマリ'（集まり）	オドロ'ク→オドロキ'（驚き）

－2型→－1型：3・4拍一段動詞→2・3拍名詞

ウエ'ル→ウエ'（飢え）	オチ'ル→オチ'（落ち）
ナガメ'ル→ナガメ'（眺め）	ワカレ'ル→ワカレ'（別れ）

－2型の起伏式動詞が名詞に転成した場合，原語の起伏式を保って，アクセント核が後ろに1拍移動し，－1型の転成語になる。ただし，以下のように起伏式の4拍五段動詞が4拍名詞に転成した場合，0型になることも多い。

－2型→0型：4拍五段動詞→4拍名詞

ヨロコ'ブ→ヨロコビ（喜び）	カナシ'ム→カナシミ（悲しみ）
アラソ'ウ→アラソイ（争い）	ツグナ'ウ→ツグナイ（償い）

これは、「ソイ」「ナイ」の母音「イ」にアクセント核を置きにくいという理由のほか、安定した0型の4拍名詞が圧倒的に多いという名詞アクセント規則に従っていると考えられる。

2.3.2 形容詞からの転成名詞

(I) 形容詞の連用形からできた名詞

形容詞の連用形が名詞に転成すると、0型は-1型に、-2型は-3型に変えられる。

トーイ→トーク' (遠く) フル'イ→フ'ルク (古く)
 オ'ーイ→オ'ーク (多く) チカ'イ→チカ'ク (近く)

-2型の「チカ'イ」は規則的には-3型の「チ'カク」になるはずだが、無声化母音の「チ」にアクセント核は置きにくく、後ろに1拍移動した型になったと考えられる。

(II) 形容詞の語幹からできた名詞

ほとんど2拍名詞で、1型である。

アカ'イ (赤い)→ア'カ (赤) シロ'イ (白い)→シ'ロ (白)
 フル'イ (古い)→フル (古) ホソ'イ (細い)→ホ'ソ (細)

(III) 文語形容詞基本形からできた名詞

2拍語は-1型、3拍語は平板式になる傾向がある。

ス'シ (酸し)→スシ' (鮓) アカ'シ (赤し)→アカシ (灯)
 オモ'シ (重し)→オモシ (重石) カラ'シ (辛し)→カラシ (芥子)

(IV) 文語形容詞連体形からできた名詞

平板式のものとは-1型になるが、新しい傾向として平板式になるものもある。起伏式のものはその型が変わらず、-3型が多い。

オモシ→オモキ', オモキ (重き) ヨ'シ→ヨ'キ (良き)
 ツ'ヨシ→ツ'ヨキ (強き) タ'カシ→タ'カキ (高き)
 タダ'シ→タダ'シキ (正しき)

以上の例から見れば、0型の形容詞から転成した名詞は、ほとんどが起伏

式になり、原語のアクセント型を保っていない。そして、-2型の形容詞から転成した名詞は大抵元の式が変わらないのである。全体的に言えば、3拍以上の形容詞からの転成名詞は、-3型が一番多く、次いで0型、-1型であり、「0型と-3型が主流となる」という体言アクセントの規則と一致する。したがって、形容詞からの転成名詞は原語品詞のアクセントを離れて、名詞のアクセントに近づいていると考えられる。

2.4 外来語は名詞アクセント

アクセントに限って言えば、原語の強弱アクセントの位置どおりに外来語のアクセントになる語もあれば、すっかり日本語化して原語アクセントの強勢位置をずらす語もある。外来語の品詞は、ほとんどが名詞で、その他、形容動詞も若干あるが、それも名詞と同じく取り扱われることが多く、サ変動詞も語幹はやはり名詞である。従って、全体的に言って、和語名詞のアクセントの一般法則に統合されて、音声的にも日本語らしさを獲得している。即ち、原則として外来語アクセントは「-3型」と「0型」とを主流とする。ただし、語末から3番目のモーラが特殊モーラ（撥音、促音、長音、二重母音）の場合には、アクセント核がその左側の自立モーラに移動する⁽²⁾。

原語アクセントの強勢位置と一致するものでは、2拍語は1型、3拍語または4拍以上の語では-3型が多数であり、和語名詞のアクセントとも一致する。1型は後ろから数えると2番目のモーラでとまってしまうので、-3型の変形と見られる。

2拍語：ガ'ス (gas) ガ'ム (gam) キ'ロ (kilo)

3拍語：イ'ンク (ink) カ'メラ (camera) ラ'ジオ (radio)

4拍以上の語：アバ'ート (apart) スリ'ッパ (slipper) クリス'マス
(Christmas) プロポ'ーズ (propose)

例外として、プレ'ゼント (present) ア'クシデント (accident) があるが、それは原語をまねた発音であり、実際には-3型に発音する人が多い。

い。原語のアクセントと－3型の間にゆれている例としては、

イ'メージ ～ イメ'ージ (image) メ'ガホン ～ メガ'ホン (mega-phone) ミュ'ージアム ～ ミュージ'アム (museum)

などがある。

古くから日本に入ってからすっかり日本語になりきったものは、日本語アクセント一般の法則に従って平板式になることが多い。これも和語名詞のアクセント法則と一致する。外来語に限って言えば、平板式の語の比率は10%程度にすぎないが、最近では日本語に定着してきた外来語は平板化する傾向が急速に強まっているようである。とりわけ若者の間で平板式の外来語を使う傾向が顕著となっている。例えば、以下のような語例。

3拍語：ガラス (glass) ピアノ (piano) ボール (ball) ボトル (bottle)

4拍以上の語：アルバム (album) アイロン (iron) モーター (motor)

ドライバー (driver ねじ回し) スニーカー (sneaker)

トレーナー (trainer)

要するに、和語名詞、漢語名詞に比べて、単純外来語のアクセントは－3型が圧倒的に多いのであるが、0型が増えてきているということが分かる。

複合語型の外来語アクセントの形は単純であり、まとめてみると、次のような2種類の形がある。

(Ⅰ) デフォルト型⁽³⁾：後ろの語が平板式の場合、後ろの語の最初の音節にアクセント核を置く。

ミナミ+アメリカ→ミナミア'メリカ (南アメリカ)

ケンチクヨー+セメント→ケンチクヨーセ'メント (建築用セメント)

コーセ'ーノー+バリカン→コーセーノーバ'リカン (高性能バリカン)

ミツユ'ニュー+ピストル→ミツユニュービ'ストル (密輸入ピストル)

(Ⅱ) 保存型⁽³⁾：後ろの語のアクセント核をそのまま生かす。

a. 後ろの語が1型である場合

テ'レフォン+セ'ンター→テレフォン・セ'ンター

タ'イムリー+エ'ラー→タイムリー・エ'ラー

b. 後ろの語が1型でない場合

チャコ'ール+グレ'ー→チャコール・グレ'ー

アイド'クシャ+プレ'ゼント→アイドクシャプレ'ゼント (愛読者プレゼント)

3. 用言のアクセント

3.1 動詞と形容詞のアクセントは0型と-2型しかない。

動詞と形容詞のアクセントは体言より単純である。原則としてその型の数は2種類しかない。つまり平板式の0型と起伏式の-2型である。

3.1.1 動詞のアクセント

単純動詞のアクセントは平板式の0型と起伏式の-2型に分けられる。アクセント核を持つ動詞において、核位置が語の後部（語尾の前の拍）にあるので、語尾と前の部分との境界がはっきりする。

0型	五段動詞	ナル(鳴る)	アガル(上がる)	アツカウ(扱う)
	上一段動詞	キル(着る)	アビル(浴びる)	モチイル(用いる)
	下一段動詞	ネル(寝る)	ハレル(腫れる)	クラベル(比べる)
	サ変動詞	スル(する)		
-2型	五段動詞	ヨ'ム(読む)	オヨ'グ(泳ぐ)	ヨロコ'ブ(喜ぶ)
	上一段動詞	ミ'ル(見る)	オキ'ル(起きる)	ヒキイ'ル(率いる)
	下一段動詞	デ'ル(出る)	タエ'ル(耐える)	シラベ'ル(調べる)
	カ変動詞	ク'ル(来る)		

3.1.2 形容詞のアクセント

形容詞の場合、筆者の調べた限りでは、よく用いられる語の中では、-2型の語が多数で、0型の語は35例しか見出せなかった。ただし、0型の語は-2型になる傾向がある。

－2 型：ヨ’イ（良い） ナ’イ（ない） コ’イ（濃い） アオ’イ（青い）
チカ’イ（近い） ハヤ’イ（早い） スズシ’イ（涼しい） オ
オキ’イ（大きい） オモシロ’イ（面白い） ヤカマシ’イ（喧
しい）

0 型：アカイ（赤い） アサイ（浅い） アツイ（厚い） アマイ（甘
い） アライ（荒く粗い） ウスイ（薄い） オソイ（遅い）
オモイ（重い） カタイ（堅く硬い） カルイ（軽い） キツ
イ（きつい） クライ（暗い） ケムイ（煙い） ツライ（辛い）
トオイ（遠い） ネムイ（眠い） マルイ（丸く円い） ア
カルイ（明るい） アブナイ（危ない） アヤウイ（危うい）
アヤシイ（怪しい） イカツイ（厳つい） イケナイ（いけな
い） イヤシイ（卑しい） オイシイ（おいしい） カナシイ
（悲しい） ガメツイ（がめつい） キイロイ（黄色い） ツメタ
イ（冷たい） ヒラタイ（平たい） ヤサシイ（易く優い）
ヨロシイ（宜しい） クダラナイ（くだらない） タマラナイ
（たまらない） ムズカシイ（難しい）〈35 例〉

アクセント核が形容詞語尾「イ」の前の拍に置かれるていることにより「イ」とそれ以前の拍との境界が示される。二重母音の「イ」にアクセント核を置きにくいのみならず、「イ」が語尾として形容詞の特徴の現れでもあるからである。したがって、アクセントにおいても、形容詞はほかの品詞と区別しやすい特徴を持っている。

3.2 複合動詞と複合形容詞のアクセント

3.2.1 複合動詞のアクセント

複合動詞は動詞のアクセントの一般規則に従い、アクセント型が 0 型と－2 型である。その文法的構成は次の通りである。

(I) 名詞＋動詞基本形

複合動詞全体のアクセント型は、前後部動詞のアクセント型によって決

定される。両方とも無核の場合、複合動詞は0型であり、一方がアクセント核を持つ場合、複合動詞は-2型になる。

キ+ハル→キバル（気張る）

ナ+ツケ'ル→ナヅケ'ル（名づける）

ユビ'+サ'ス→ユビサ'ス（指差す）

（Ⅱ）形容詞語幹+動詞基本形

（Ⅰ）の規則と同じである。

タカ'イ+ナル→タカナ'ル（高鳴る）

チカ'イ+ヨセル→チカヨセ'ル（近寄せる）

アオ'イ+サメ'ル→アオザメ'ル（青ざめる）

オ'オイ+スギ'ル→オースギ'ル（多すぎる）

（Ⅲ）動詞（連用形）+動詞基本形

前部動詞のアクセント型によって決定されるが、複合動詞全体のアクセントは前部動詞のアクセント型と逆である。つまり、前部動詞が平板式なら、全体で-2型になり、起伏式ならば0型になる。

ヒク+ハル→ヒツパ'ル（引|っ張る）

ユル+ウゴカ'ス→ユリウゴカ'ズ（揺り動かす）

ミ'ル+オクル→ミオクル（見送る）

ウケ'ル+ト'ル→ウケトル（受け取る）

3.2.2 複合形容詞のアクセント

複合形容詞は文法的に形容詞の性質を持ち、アクセントも原則として形容詞の一般法則に従って、-2型になる。ただし、同時に0型のアクセントを持つものもある。

（Ⅰ）名詞+形容詞基本形

この文法構造の複合形容詞には、後部の形容詞が複合語全体のアクセントを決定する働きをする。後部の形容詞は多く元のアクセントを生かす。後部が平板式であれば、全体が平板式になるが、形容詞アクセント全体の流れに沿って-2型に変化する傾向もある。後部が起伏式であれば、全体

がそのまま起伏式になる。

a. 後部形容詞が平板式である場合

テ' + アライ → テアライ (手荒い)

ブ + アツイ → ブアツイ (分厚い)

ホド + トーイ → ホドトーイ (程遠い)

b. 後部形容詞が起伏式である場合

ナ + タカ'イ → ナダカ'イ (名高い)

ナ'サケ + ナ'イ → ナサケナ'イ (情けない)

チカラ' + ツヨ'イ → チカラヅヨ'イ (力強い)

(Ⅱ) 動詞連用形 + 形容詞基本形

このタイプの複合形容詞は前後のアクセント型が平板式にせよ、起伏式にせよ、全体が起伏式の-2型になる。

キク + ツライ → キキヅラ'イ (聞きづらい)

ネル + クルシ'イ → ネグルシ'イ (寝苦しい)

ム'ス + アツ'イ → ムシアツ'イ (蒸し暑い)

(Ⅲ) 形容詞語幹 + 形容詞基本形

この場合は前後の形容詞が無核であれば、全体のアクセント型は平板式になることが多い。いずれの形容詞が核を持っていたても、複合形容詞全体として-2型になる。

ウスイ + クライ → ウスグライ (薄暗い)

カタイ + クルシ'イ → カタクルシ'イ (堅苦しい)

ホソ'イ + ナガ'イ → ホソナガ'イ (細長い)

フル'イ + クサ'イ → フルクサ'イ (古臭い)

オモシロ'イ + オカシ'イ → オモシロオカシ'イ (面白おかしい)

アクセントにおいて、(Ⅰ)タイプの後部形容詞は主導的な存在であり、前部名詞のアクセント型をかまわず、複合形容詞全体のアクセント型を決定する。(Ⅱ)タイプの複合形容詞の中では、後部の形容詞は前部の動詞としっかり結びついて一つの語として機能する。(Ⅲ)タイプにおけ

る前後の形容詞は対等の位置にあり，両方とも複合形容詞のアクセント型を決定する。

3.3 転成動詞と転成形容詞のアクセント

転成動詞と転成形容詞はある品詞が変化してできたものである。原則として，元の語アクセントの型を生かす傾向がある。つまり，元の語は平板式ならば平板式，起伏式ならば起伏式である。

3.3.1 転成動詞のアクセント

(Ⅰ) 動詞からの転成動詞

意味こそ変っても，品詞的には形態素（語幹）は変化せずに，そのままであるので，アクセントも変わらない。

0 型→ 0 型：ウル→ウレル（売れる） キル→キセル（着せる）

－2 型→－2 型：ミ'ル→ミエ'ル（見える） モド'ル→モド'ス（戻す）

(Ⅱ) 形容詞語幹からの転成動詞

文法的に品詞が形容詞から動詞に変化するが，用言という枠ではその文法的働きが一致し，アクセントも形容詞の元のアクセントを変えない。

0 型→ 0 型：カタイ→カタメル（固める） マルイ→マルメル（丸める）

－2 型→－2 型：オシ'イ→オシ'ム（惜しむ） ホソ'イ→ホソメ'ル（細める）

ただし，例外もある。

ヒロ'イ→ヒロゲル，ヒロガル（広げる，広がる）

カナシイ→カナシ'ム（悲しむ）

アヤシイ→アヤシ'ム（怪しむ）

(Ⅲ) 名詞からの転成名詞

品詞こそ名詞から動詞に変化した，ただ語尾を貼付したもので，アクセントは元の形を保つ。

0 型→ 0 型：タイジ→タイジル（退治る） ツマ→ツマム（撮む）

－2 型→－2 型：リ'キ→リキ'ム（力む） デ'モ→デモ'ル（デモる）

3.3.2 転成形容詞のアクセント

(I) 形容詞語幹からの転成形容詞

アクセント型が変わらない。

0 型→ 0 型：オモイ→オモタイ（重たい）

ネムイ→ネムタイ（眠たい）

－2 型→－2 型：キタナ'イ→キタナラシ'イ（汚らしい）

ニク'イ→ニクラシ'イ（憎らしい）

「～らしい」型の形容詞はすべて－2 型である。

(II) 動詞の活用形からの転成形容詞

文法的には同じ用法であるので、動詞の元のアクセントが形容詞に転成しても、そのアクセントは変わらない。

0 型→0 型：*アカル→アカルイ（明るい）

クスグル→クスグッタイ（くすぐったい）

－2 型→－2 型：ウラ'ム→ウラメシ'イ（恨めしい）

ヨロコ'ブ→ヨロコバシ'イ（喜ばしい）

(III) 名詞からの転成形容詞

名詞からの転成形容詞は、形容詞語尾「イ」を持つが、元のアクセントは変わらない。

キイロ→キイロイ（黄色い） シカク'→シカク'イ（四角い）

(IV) 形容動詞語幹からの転成形容詞

形容動詞のアクセント型は変わらず、転成形容詞のアクセント型（－2 型）になる。

アタタ'カ（ダ）→アタタカ'イ（暖かい）

コマ'カ（ダ）→コマカ'イ（細かい）

ヤワラ'カ（ダ）→ヤワラカ'イ（柔らかい）

(V) 副詞からの転成形容詞

元のアクセントから形容詞の一般的アクセント型（－2 型）に変化する。

ハナハダ→ハナハダシ'イ（甚だしい）
 イカ'ガ→イカガワシ'イ（如何わしい）
 ワ'ザト→ワザトラシ'イ（わざとらしい）

複合動詞・複合形容詞及び転成動詞・転成形容詞は、アクセントにおいて、動詞と形容詞と同様に2種類のアクセント型(0型, -2型)しかない。それは、動詞・形容詞のアクセント規則に当然のことながら従っている。

3.4 形容動詞語幹のアクセントは名詞に準じて0型か-3型

形容動詞を独立した品詞として扱うには、形態上の問題点が残されている。特に、語幹の部分が同時に名詞の性質を持っているものが多いからである（例えば、「平和」という語は、「平和な村」では形容動詞、「平和の女神」では名詞である）。

アクセントにおいても、形容動詞と名詞は同じ型を取り、名詞アクセントの法則に準じて、0型と-3型を主流とする。

平和 ハイワ→ハイワ（ダ） 健康 ケンコウ→ケンコウ（ダ）
 綺麗 キ'レイ→キ'レイ（ダ） スマ'ート→スマ'ート（ダ）
 スム'ーズ→スム'ーズ（ダ）

形態上特別なケースとして、形容動詞にはまた、「らか、やか、げ、がち、的」などの接尾辞を持つものも多いが、その中で、「らか、やか」のついたものはすべて-3型であり、「げ、がち、的」などの接尾辞によってできた形容動詞の語幹は全部0型である。

-3型：ニギ'ヤカ（賑やか） アキ'ラカ（明らか）
 0型：アブナゲ（危なげ） アリガチ（ありがち）
 シャカイテキ（社会的）

また、形容動詞には、その語幹が副詞からなったものもあるが、原則として、元の語のアクセントに従う。形容詞の語幹である場合は、形容詞のアクセントの法則を保ち、-2型である。しかし、その数はそれほど多く

はない。

(副詞) ワ'ズカ(わずか)→ワ'ズカ(ダ) スコ'シ(少し)→スコ'シ(ダ)

イロイロ(いろいろ)→イロイロ(ダ)

(形容詞の語幹) マッシロ'イ(真っ白い)→マッシ'ロ(ダ) アタタカ'
イ(暖かい)→アタタ'カ(ダ) ヤワラカ'イ(柔らかい)
→ヤワラ'カ(ダ)

以上から、形容動詞語幹の文法的構成が複雑であるにもかかわらず、音声文法においては、形容動詞語幹のアクセントは主に0型と-3型であり、名詞のアクセント規則に準じることが分かった。

4. ま と め

自立語のアクセントは品詞別にその特徴が異なる。体言アクセントは平板式の0型と起伏式の-3型が主流で、拍数の増加につれて、-3型の語が増える傾向がある。

外来語は基本的に名詞なので、和語の名詞アクセントの文法に従う。外来語の語形は長いことから、-3型の起伏式が多く、すっかり日本語に定着したものには0型の平板式も若干見られる。

用言では、動詞アクセントと形容詞アクセントはアクセント型が類似し、平板式の0型と起伏式の-2型の2種類しかない。ただし、形容動詞は語幹の構成が複雑ではあるが、名詞から転用されたものが多いため、名詞アクセントの文法に従って、0型平板式と-3型起伏式を取る。

複合語のアクセントは、形態素のアクセントを一本化する統語機能が働いている。前後の形態素の品詞、拍数によって、複合語のアクセントを一定の型に安定させるが、それにはアクセント独特の文法があり、全体的には品詞によって、一定のパターンを作っている。すなわち、複合語はその品詞のアクセントに従うのである。

転成語は意味的にも、音声的にも原語との関わりを保っているのです、そのアクセントも原語アクセントの特徴を保っている。即ち、原語が平板式ならば転成語も平板式であり、原語が起伏式ならば転成語も起伏式であり、例外はすくない。

注

- (1) 塩原慎次郎は漢語二字語について「筆者の調べでは、明治以降の程々に新しい部類に入る二字漢語の九割ほどが、また新しい省略二字漢語の殆どが平板型です。」と述べられている。(塩原慎次郎 1995『日本語アクセントの習得』p. 81 近代文藝社)
- (2) 窪園晴夫 (1998)『音声学・音韻論』(p. 202) による。
- (3) 複合型の外来語は後部要素が長いものが多い。本稿では窪園氏が後部要素の長い複合名詞アクセント規則について用いた「デフォルト型 (N2 の最初の音節にアクセント核を付与する)」、「保存型 (N2 のアクセント核を保存する)」を借用した。(窪園晴夫 1997「音韻構造から見た語と句の境界」)

引用・参考文献

- 天沼寧・水谷修・大坪一夫 (1978)『日本語音声学』(くろしお出版)
- 上野善道 (1999)「複合名詞後部要素のアクセント型保存」『言語と文化の諸相』
- 大坪一夫・水谷修 (1977)『音声と音声教育』(日本語教育指導参考書 1) (文化庁)
- 音声文法研究会編 (1997)『文法と音声』, (1999)『文法と音声Ⅱ』, (2001)『文法と音声Ⅲ』, (2004)『文法と音声Ⅳ』(くろしお出版)
- 川上夔 (1975)『日本語アクセント法』(学書房出版)
- 川上夔 (1995)『日本語アクセント論集』(汲古書院)
- 金田一春彦 (1975)『日本語音韻の研究』(東京堂出版)
- 金田一春彦監修 (2001)『新明解日本語アクセント辞典』(三省堂)
- 窪園晴夫 (1998)『音声学・音韻論』(くろしお出版)
- 窪園晴夫 (1999)『日本語の音声』(岩波書店)
- 佐藤大和 (1989)「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」『講座 日本語と日本語教育』第 2 巻 日本語の音声・音韻 (上) (明治書院)
- 塩原慎次郎 (1995)『日本語アクセントの習得』(近代文藝社)
- 田代晃二 (1973)『日本語アクセント教習本』(創元社)
- 徳川宗賢編 (1980)『論集日本語研究 2——アクセント』(有精堂)
- 中條修 (1990)『日本語の音韻とアクセント』(勁草書房)

- 日本語教育学会編（1982）『日本語教育事典』（大修館書店）
- 日本放送協会（1966）『日本語発音アクセント辞典』（日本放送出版協会）
- NHK 放送文化研究所（1998）『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』（日本放送出版協会）
- 平山輝男編（1960）『全国アクセント辞典』（東京堂出版）
- 和田実（1975）「アクセント・イントネーション・プロミネンス」『日本語と日本語教育——発音・表現編』（国語シリーズ別冊 3）文化庁・国立国語研究所共編（大蔵省印刷局）
- 申泰海，趙基天，王笑峰編（1991）《詳解日語語法辞典》（吉林教育出版社）
- 劉耀武著（1993）《日語語法研究史》（高等教育出版社）

（ソウ キン・中国・吉林大学外国語学院講師
2004 年度関西学院大学文学部客員研究員）